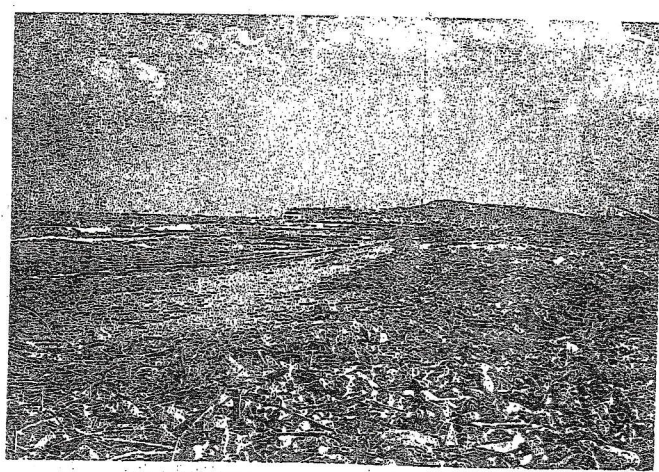


私たちは国土と民を失った

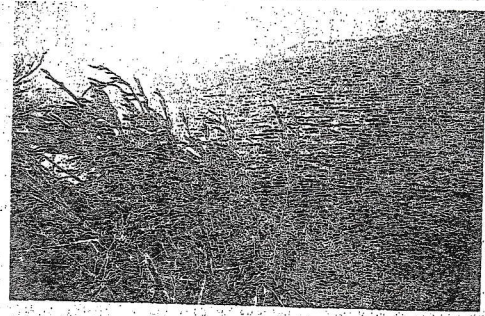
水俣病、そして原発事故

藤原 新也
作家

ふじわら・しんや 1944年福岡県門司市(現・北九州市)生まれ。作家、写真家。著書に『東京漂流』『死ぬな生きろ』など多数。近著に作家石牟礼道子さんとの対談集『なみだふるはな』。



●原発を20年前にのぞく福岡の海
●過去からの風がふいているかのような水俣の海
||いづれも藤原新也氏撮影



「3・11」から後、あらためて水俣病が注目されている。企業のさまざまな安全管理による破綻と有毒物質の放出。生物濃縮。危機にさらされる国民の生活と命。罪なき動物たちの犠牲。海の汚染。企業のウソとそれに追従する官僚・政府……。東京電力福島第一原発とチッソ水俣工場による環境汚染と、それに伴う企業や政府の対応が、双生児のように酷似しているか

政治生命かけるべきものは

らた。水俣病発覚後の住民とチッソとの折衝では会社側は居直り、これは一(心情は介さない)交渉で済むから」と事務処理的発言をした。『苦海浄土』の作家石牟礼道子さんが「それはあんまりじやありませんか」と問うと、会社は「これは文学的問題ではない」と切り捨てた。加害者側が居直り反政姿勢に転じるといふ構図も先の電力会社の株主総会で同じ様相を見せた。かくも相似した二つの思まわしい歴史が繰り返されているわけだが、水俣と福島はすべてが軌一であるというわけではない。

水俣の水銀汚染は被害が長期にわたったりかつ深刻だが、海洋に限定されたその性質上、被害の拡散範囲に地域性があるのに対し、福島の場合、チェルノブイリ原発事故によって三重のお茶から多量のセシウムが検出されたことが示すように、福島を最大被害地として日本のみならず全世界に広がる。海底に沈着した水銀は、波濤と埋め立てで封印されたが、陸、海、空に拡散した放射性物質の封印は不可能だ。

もうひとつ私たちが十分に銘記していない決定的な違いがある。それは水俣では土地や家、家族は残ったが、福島では我々は「国土を失った」ということだ。そしてその国土に住む国民から土地や家を奪

い、流浪の民に追いやるたどろろとだ。この「原発難民」とも言える方々は人知れず私たちの傍らにいる。

福島では多くの悲惨を見てきた。しかし私が一番ショックを受けたのは、千葉・房総の自宅付近のドライブインで厚食をとっている時、目の前のテーブルに一週間飲みます(比喩でなく事実として)で逃げ回り、憔悴しきった福島県浪江町からの避難民家族がおられたことだ。私はその家族の悲劇を自の当たりとした時、この国は有史以来初めて、自ら、国土を失い、民を失ったのだなと痛感した。

石原都知事が守ろうとしている尖閣諸島・魚釣島の面積は3.8平方キロ。福島の原発事故で失った国土は飯館村だけでも230平方キロ。総計はゆうに尖閣諸島の百倍にも及ぶだろう。

こんな第一級の緊急時に、ドショウの誠実を騙った野田さん、あなたは消費税増税法案成立に政治生命をかけると言った。大飯原発の再稼働にも政治生命をかけていたらしい。

しかし、いま一國の長が政治生命をかけるべきことは明白だ。この巨大な国土の喪失に対処しよう対処するからであり、日本を壊滅に導くかも知れない福島第一原発4号機の倒壊阻止、そして路頭に迷う国民をどう救済するかである。

